

酔って可愛く愚痴る聖
女をお持ち帰りしたら、
勇者の称号をもらつた
んだが。なんで？

尾張のらねこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

偶然酒場で知り合つた聖女と親しくなつて「お持ち帰り」をしたら、勇者と認められ
た。

え、なんで？

まあ、特に魔王を倒しに行つたりはしないので、俺としては困らないんだけど。
聖女は可愛いので、不満は特にないし。

※小説家になろうにも投稿しています

目次

酔つて可愛く愚痴る聖女をお持ち帰りしたら、勇者の称号をもらつたんだが。なんで?

酔つて可愛く愚痴る聖女をお持ち帰りしたら、勇者の称号をもらつたんだが。なんで？

話をすれば、こいつ可愛いな、と思うことは何度かあつた。

たまに酒場に現れて、端の席でフードをかぶつたまま独りで時折ぶつぶつ言いながら飲んでる女。

小柄なのに胸はそれなりにあつたから、からかいついでに口説きに行く輩が出ないのが腑に落ちなくはあつたが。

どんよりするような黒いオーラを常に身に纏つていて、誰も近寄ろうとはしていかつた。

俺も、たまたま混んでいて隣の卓しか空いてなかつたときにそこに座らなかつたら、関わりを持つことなんてなかつただろう。
鞄から手持ちのガラス玉がこぼれて、彼女のほうに転がつていったのも偶然だつた。決して口説きの手口とかじやない。

「すまんが、足元に転がつていったもの、拾つてもいいか?」

「……?」

物取りだの下着を覗き込んだりしたと思われても困るから声をかけてはみたが、反応が薄い。

存分に酔っているのか、俺の言葉がうまく理解できていないかのように。

代わりに、それまで見たことがなかつたフードの下の顔がちらつと見えた。

若いというか、幼く見えるほどの顔立ち。瞳は酔いに潤んでいて、小さな鼻も口も整つていた。

美しい少女と言つていいだろう。いつも独りでいるからには貴族ではないだろうが、令嬢と見間違えられても不思議でもない。

なんでこんなところで飲んでて、そして無事なんだ?

そんな単純な疑問が湧く。

ここいらはきちんと教会も配置されている地区なので最低というわけではないが、治安が良いような場所ではなかつた。

喧嘩は日常茶飯事、人殺しも年に数十件はある。死体が見つかっているのだけではな。女性が酔つてフラフラと歩いていれば、路地裏に連れ込まれて不埒なことをされた

り、そのまま消息を絶つても不思議ではない。

だがなぜか、彼女が酒場で独りで飲んでいることを、追求するほど不思議には思わなかつた。

彼女はそういうものだと認識していたかのように。

一応声はかけたので、そのまま卓の下から素早く拾い上げる。

彼女はなにが気に入ったのか、きらきらした目で俺の指先にあるガラス玉を見つめていた。

透明度が高くて、ガラスだが結構固い。幸い、落として傷が入つたり割れたりもしないようだ。

「安物だけど、欲しけりややるよ。かわりにすこし、愚痴につきあつてくれ」

腕を伸ばすと、つられて上に向けた手のひらにガラス玉をそつと乗せる。

「え？ あ、ありがとうございます……これが安物？」

ついでに店の親父に声をかけて、席を移つた。トラブルの元なので混んでも店のほうから相席を頼んだりはしないが、自発的にする分には止められることもない。

「それ、宝石みたいに見えるだろ。透き通つてて球形の宝石なんて珍しいからお宝だと思うだろうが、隣国の遺跡ではよく出るガラスの球でな……」

見つけたときのことを思い出しながら語る俺を、ときおり相槌を打ちながら彼女は興味深そうに見ていた。

それ以来、酒場で会えば一緒に飲むようになった。そんなに頻度が多いわけじゃなく、週に1～2回くらいだつたが。

異国の遺跡を巡った話をせがまれてしたり、彼女が仕事での愚痴を漏らすのを聞いて慰めたり。

愚痴は意外と多かつた。上役というか相談役?の爺どもが孫娘扱いしてうるさいらしい。普段溜め込んでいるのか、細かいことばかりで聞いていて微笑ましかつたが。

しばらくして友人関係と言つても差し支えないくらいに親しくなつて、黒いオーラを撒き散らすのが減つても、なぜか回りから距離は置かれているのが不思議だつた。

話をするのは、俺と彼女のふたりだけ。

「こんなに可愛いのにな」

「ふえっ!?

飲んでいる間も頭を覆っているフードを取ることは決してなかつたが、わりと視線を

向けてくれることになつたので、彼女の顔を拭む機会はそれなりにあつた。いまも楽しそうに微笑んでいた顔が、俺の発言で一瞬で真っ赤に染まる。しまつた。

ぽろつと漏れてしまつた本音は、だがそれだけでは止まらなかつた。

「必死に仕事に取り組んでるのにそれに値するほど報われてもおらず、でも愚痴をこぼしながら手は抜かないだろ?」

「まあ、そういうお仕事ですので……」

「それはお前の良いところだし、俺は好きだよ」

酔つて口が軽かつたことは否めない。

いや、言い訳をさせてもらえば、それ自体は女として好きだと言つたのではなかつたんだ。

彼女に對して好意がなかつたかというと自信はないが、そういう相手として見ていたつもりはなかつた。

だがたぶん、彼女はそういう意味を含んでいることを察したんだろうと思う。俺にもわかつていなかつた本音を。

「私も、あなたとこうしている時間、大好きなんです」

卓の上で、俺と彼女の指が少しだけ触れた。さぐるようにしながら、遠慮がちに絡めてくる。

「こいつ可愛いな、と思つた俺は悪くないと思うだろ？
ちよろいな、と自分でも思うけど。

その晩、閉店まで飲んだあと、俺は彼女を自分の部屋に連れて帰った。

「お持ち帰り」だな。

ただ、彼女は意識もはつきりしていたし、ややおぼつかないながらも自分の足で歩いてもいた。

俺も酔つていて自制心は欠けていたが、無理に誘つたわけじゃない。泥酔した女を意識がないままに犯すような趣味は決してない。

俺も彼女も、大人だ。

男と女が夜に同じ部屋に帰つて、そこから先どうなるかは、十分にわかつていた。

部屋に入るなり、待ちきれなかつたように互いの体を抱きしめて、口づけをした。

俺からだけではなく、彼女のほうからも積極的に唇をあわせてくる。そして、舌も。慣れているわけではなさそうだったが、遠慮もなかつた。知識としてもつている行為

を、はじめて実践するようなぎこちなさ。

愛おしく思えて強く抱きしめて、唇を離した。

狭いベッドへと導く。それなりのもので、寝心地は悪くないはずだつた。

もつとも、彼女はあまり、そんなところにこだわってはいないよう見えたが。
これから俺とする行為への、期待と不安。そして、すこしの欲情とおそれが表情に見
て取れる。

安心させるように彼女の頭を撫でてやりながら、俺は彼女の身体へと触れていった。

「一緒に生きて欲しいって言つたら、重いか？」

「望んでもらえるのであれば、伴侶として生きたいです。私でも良ければ、ですけど」

結ばれる前に、愛の言葉に混じつて将来の話をして、眞面目に誓いを立てたりしても。

「途中で痛がつても、止めなくていいですから、絶対に最後までお願ひします」

彼女が、そういうことをするのがはじめてで、ぎこちなく少しづつするはめになつて
も。

「身体のほうは大丈夫か？」

「もう一度だけ、して欲しいです」

そのままお互いの身体に翌朝まで溺れていたとしても、非難されるいわれもないはず

8 酔って可愛く愚痴る聖女をお持ち帰りしたら、勇者の称号をもらったんだが。なん

……なんだが。

ことは、それだけでは済まなかつた。

翌朝というか昼に「すこし戻らないといけません」とメモを残して彼女が姿を消し。翌々日に教会の高位神官が突然やつてきて、話がしたいと言われ聞かされた話は以下のような感じだつた。

俺は最後まで一方的に聞いてるだけだつたし、神官の発言だけになるが。

「殴り聖女って知っていますか？」

「当代の聖女、殴り聖女なんです。前衛で物理で殴るあれです。力こそパワー！　みた
いなノリです。教会の聖女はそもそも、ごく一部の例外を除いて殴り聖女なんですけ
ど」

「もちろん回復とか結界とかも一流んですけど、基本的には物理攻撃で物事を解決す
るというスタンスなんですね」

「それで、当代は歴代最強の殴り聖女って言われてるんですよね。そう、ご存知のあのお

方です。単身ではこの国の中ではないかとも言われています

「あ、これ一応は対外秘なので、公言しないようにお願いしますね」

「当然ですが、戦闘の技術が高いだけではありません。腕力も体力も尋常ではないです」

「普通に聖騎士と素手で殴りあつて勝てますからね。あの小柄な体躯で、あの筋骨隆々とした彼らとです」

「愛の行為中に抱きつかれたら背骨折れたりしそうな女性と、そういうことしたいと思います？」

「いくら^{そぞ}注ぎ込んでも終わらない無限の体力を持つ女性とでは？」

「誰しも思うはずです、

『そんな女を娶るなんて、どこの勇者だよ』と

「枢機卿団は、満場一致であなたのことを勇者と認めました。反対などあると思いますか？」

「どうか、なんで生きてるんですかあなた」

やかましいわ。

さらに次の日、俺は王都の中央にある教会本部に呼び出された。

きらびやかな高位神官の服を身につけて出てきた美しい聖女さまに、ぼうつとなつて三度見くらいはしたが。

神気を纏つた彼女は、けれども嬉しそうに俺を見て照れ笑いを浮かべた。中身は一緒にようで安心する。

以下も長くなるので、彼女の発言だけを抜粋させてもらうことにしよう。

俺の反応なんて、顔合わせが終わるやいなや膝の上に乗つてきて抱きついて甘えながら耳元でささやく彼女の姿に、ちょっと正気じやなくて頷くだけだつたし、必要ないだろう。

高価そうな服がたぶん皺しわになつたんじゃないかと思うんだけど、俺のせいじゃないから。

「いろいろとごたごたしていたので会えなくてごめんなさい。あの夜以来ですね」

「現役聖女が婚姻の誓いをして純潔を失つたので、教会内部でちよつとだけ揉めまして」

「ええ。未婚姻の聖女が処女でなくなると、聖女の資格を失いますね。もつとも、意識のない間ですら無理やり襲おうとすると天罰が下るので、滅多にありません。恋をして自らを捧げようとした聖女がやらかした記録は残っていますが」

「先に結ばれる相手の妻になつていれば大丈夫です。前例も何度もあります」

「あの夜、口頭ですけど抱かれる前に結婚の誓いは神の前でおこないましたから。あなたにも了承してもらいましたよね」

「あ、覚えてるみたいですね。よかつた。記憶がないとか言われたら泣いてしまいます」

「誓いですけど、神の使いたる聖女が意識すれば神前ということになるのです。わりと融通はききますよ。大丈夫だと思います」

「事前に先々代の聖女さまにも相談しましたが、につこり笑つて応援されましたね」

「そうですね。自分の気持ちは自覚していて、事前にそうなれる可能性を調べてはいました。相手がいなければ、思いもしなかつたんですけど」

「ただ、こればかりは絶対大丈夫かと言われると確証はなかつたですね。100に1つ

「くらいはダメかもしれない、くらいですけど」

「いまのところ、三日目を迎えても加護が弱まつたりする気配もないですし、そもそも神前で明確に了承も得ていますし、大丈夫だと思うんですけど」

「もしダメなら、次の聖女の選定を急ぐしかありません。聖女がいない期間があると国が滅びるというものでもありませんし、気にする必要はないのです」

「万が一にでも、罰を受けることになるならば逃げましよう。どこまでもお供します」「いえこの国を見捨てたいわけでは決してないんですけど。でも、聖女でも自分の幸せを求めてても良いと思いませんか。多少のリスクは許容されるべきです」

「もしかしたら聖女が今日、怪我や病気で死んでしまうかも知れないでしよう？」でも

それに対処するのは国であつて、私ではないと思いますよ。もう死んでますし」「その考えが聖女失格だと言われてしまえば、それまでなんですけど。でも聖女である前に、女でありたいと思つてしまつたのです」

「どうか末永くよろしくおねがいしますね、あなた勇者様」

まさか聖女なんて伴侶を得るなんて思つてなかつた俺は、だがまあ、概ね満足はしていました。

大袈裟な言い方をすれば、彼女と出会ったのは運命であつたのだろう。

酒場で、常に独りでいた彼女。それに話しかけた俺。

まさか公務以外の聖女が常に身にまとう『人避け』が効かないのが聖女の伴侶たる者の第一の条件であるなんて、俺が知っているわけがないだろう？

ましてや第二の条件が、聖女に性的興奮を覚えて抱くことができるかだとか、処女膜を物理的に打ち破れるかどうかだとか。

役目自体は、聖女と共にあつてそれを守り、可能なら子をもうけるくらいで、ゆるいものではある。勇者とは、名誉職のような称号であるらしい。

不満は特はない。それがどういう意味をもつか知っている、教会の関係者に会うたびに、微妙な表情をされる以外は。

聖女の勇者になつてしまつた俺は、今日もお役目を果たすべきだろう。まずは彼女を抱きしめながら、そつと口づけをした。



歴代最強として知られる豪腕聖女は、数多の戦いにおいて前線に立ち、常勝不敗であつたと伝わる。

その傍らには、佩いて聖女に寄り添う、伴侶である勇者の姿が常にあつた。

なお、その剣が抜かれた際の記録は残つておらず、勇者の強さについては判然としない。

複数の枢機卿の日記に、「過不足なくあの聖女の夫である眞の男である」と残るのみである。

子だくさんであり、娘の一人はのちに聖女となつた。父と母のあいだに、母によく似た聖女姿で並んで立つ姿絵が教会に残されている。

勇者との出会いの際に貰つたガラス玉を、生涯宝石のように大事にし、子どもたちにも決して触らせなかつたという。